

『女の一生』における固定観念と「馬車」

L'Idée Fixe Et La Voiture Dans 《Une Vie》

西村道信
Michinobu NISHIMURA

1. 0 モーパッサンと乗物

モーパッサンの作品の多くを通じて言えるであろうことは、乗り物が多く登場することである。そしてそれも、ただ単に登場人物をある場所に運ぶだけのために使用されるのではなくて、乗り物の現われる場面自体が、それなりに一つの印象的な場面を構成していることが往々にしてある。乗り物の種類も多く、馬車、馬、船などが頻出する。モーパッサンが作品中に乗り物を多く登場させるのは、どのような動機によるものなのか？なぜ、かくもモーパッサンは乗り物に執着したのか、あるいは、せざるを得なかったのか？このことについて先ず考え、それからモーパッサンの作品にある精神へと進んでゆくために、一つのアプローチの方法として、「馬車」というものを中心にしてこの問題への糸口を見出したいと思う。

2. 0 『女の一生』と「馬車」

ここで、『女の一生』という作品を選んだのは、これがモーパッサンの最初の長篇小説であり、大変な苦労の後、やっと産み出されたものであるだけに大きな期待と興味が持たれるからである。この作品は、一般に良く親まれており、比較的世評も高いようである。トルストイは、これを評して以下のように述べている。

「真の芸術作品には3つの特性が必要である。その3つとは：自身の主題に向かう真の態度・道義的態度、明解な表現、即ち同じことだが形式の美、そして3つ目には誠実—自分が描写するものへの偽らざる愛や偽らざる憎悪である。これはモーパッサンの作品中、『女の一生』だけが持っているものであり、ユーゴーの『レ・ミゼラブル』以後のフランス文学の最高のものであろう。」¹⁾

さて、『女の一生』をよく気をつけて読んでみると、誰でもすぐに気付くことがある。それは、乗り物、それも馬車、馬、船などが頻りに登場し、特に馬車に関しては、その種類も

『女の一生』における固定観念と「馬車」

多く、それぞれが特徴的な使い方をされていて、モーパッサンの文体の構成上でも重要な位置を占めているために、いわば、馬車を中心にしてこの作品が進行してゆくかのような感があると思われる程である。馬も数多く登場するが、動物、特に下等な動物を作品に登場させ、それに人間の姿を反映して「生」の問題を描こうとするのが、自然主義作家によく見られる手法である。ゾラの『ジェルミナル』には馬が象徴的に使用されており、ドライサーの『フィナンシア』にはイカと大エビの戦いが描かれている。こういった、所謂 animal symbolism が効果を呈している²⁾。

ところが、モーパッサンの場合には、動物よりも、むしろ馬車に執着することによって同様の効果を収めたのではないだろうか。その理由は、彼の出世作である『脂肪の塊』が馬車を中心にしてストーリーを展開してゆく手法をとり、最後の場面がいかにも印象的であると賞賛されたことが一因となっているとも言えなくはない。だが、そのような単純な理由から、モーパッサンは他の数々の作品中に乗り物を登場させているとはどうしても考えられない。そうではなくて、モーパッサンを心の奥底に潜む何かもっと深淵なもの、潜在意識的なものが、モーパッサンをそのようにさせているように思われるのである。

モーパッサンは、喜劇の短篇を書くときにさえも、この潜在意識が働き、乗り物を登場させたりしている。『花祭り』などはその例であろう。

3. 0 『女の一生』に登場する「馬車」の種類と頻度

- (1) voiture : 一般に人や者を運ぶ運搬具。車(馬車)。(30回、そのうち「汽車」として2回。)
- (2) calèche : 無蓋の4輪馬車。前方には背もたれ付きの御者台があり、後方には折りたたみ式の幌が付いている。(13回)
- (3) carriole : 軽い並の馬車。幌付きで2輪。ボロ馬車の意もある。(13回)
- (4) charrette : 2輪のかなり軽い馬車。(5回)
- (5) chaise de poste : 駅馬車。速く進めることができるようになっている軽馬車。(3回)
- (6) berline : ベルリン馬車と呼ばれるもので4輪で窓ガラスを備え、幌でおおわれている。大型で旅行用。地名より名付けられた。(2回)
- (7) phaéton : 軽4輪馬車。高くて無蓋であり、前の座席に御者ともう一人が、後部座席には2人が座れる。ギリシャ神話の Φαεθων が語源。(2回)
- (8) véhicule : 運搬具。乗り物(馬車)。絵画の方では「展色剤」の意がある。(1回)
- (9) équipage : 馬、馬車、人などの一行をさす。又、華美な馬車の意もある。(1回)
- (10) guimbarde : 4輪の荷馬車。長くて幌付き。古い(ボロ)馬車の意もある。(1回)
- (11) cabane ambulante : 移動式小屋(羊の番をするためのもの)。cabaneには動物の「隠

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

れ家」の意がある。（1回）

上記の馬車の名を示す名詞が、代名詞で出た場合を除くと、合計72回見られる。そのうちでも一番頻度の高いものがvoitureである。voitureは、通常、馬車一般或は乗り物を指すが、モーパッサンは、この『女の一生』という作品に限って、特別な注意を払ってこの語を使用している。

4. 0 「馬車」とその乗り手との関係について

4. 1 「馬車」とその乗り手との関係

（例1）

Mais, au bout de trois minutes, elle sortit, en courant, de la chambre de sa mère, criant par toute la maison: «Papa, papa! maman veut bien; fais atteler.»

Le déluge ne s'apaisait point; on eût dit même qu'il redoublait quand la calèche s'avança devant la porte. (p.5)

だが、3分もたつと、彼女は母の部屋から駆け出してきた。そして家中にひびくような声で叫んだ。「お父さま、お父さま！お母さまがよろしいって。馬を付けさせてちょうだい。」

（例2）

Jeanne était prête à monter en voiture lorsque la baronne descendit l'escalier, soutenue d'un côté par son mari, et, de l'autre, par une grande fille de chambre forte et bien découplée comme un gars. (p.6)

ジャンヌは馬車に乗ろうとしていたがその時、男爵夫人が、一方は夫に、一方は若者のように整った体格をした、力の強い、背の高い小間使いにささえられて階段を降りてきた。

例の1と2とを比較すると、例1の方では馬車を指すのに calèche という語を使い、例2の方では voiture を使っている。この2例は文脈上同一の馬車を表すが、乗り手が貴族だとか、何か高級なイメージがあるとか、又は良く言われる「藪にも晴れにも」の「晴れ」に当たるような場合に限って voiture という語が使用されている。voiture は馬車一般をさす言い方であり、特定の馬車の類を示さないの、自然その表現の仕方がまろやかで婉曲的となり、上品な言い方になるのであろう。それゆえ上記の乗り手とはぴったりと一致した表現ということになる。

『女の一生』における固定観念と「馬車」

4. 3 「馬車」と周囲の状況との関係、社会的背景

(例3)

La berline, au grand trot des deux chevaux, dévala rondement sur le quai, longea la ligne des grands navires dont les mâts, les vergues, les cordages dressaient tristement dans le ciel ruisselant, comme des arbres dépouillés; puis elle s'engagea sur le long boulevard du mont Riboudet. (p.7)

馬車は2頭の馬が疾走するのにまかせて、全速力で河岸の方へ降りていった。そして大型の船の並んだ側を走っていった。船の帆柱や帆げたや綱具は、雨の降りしきる空に、裸木のように、もの悲しげに立っていた。やがて、モン・リブーデの長い大通りさしかかった。

例の3では、周囲の状況等によって、例1、例2に出た同一の馬車が、今度は名を変えて berline となってしまうている。つまり、これは navires「船」という語との相互作用によるイメージの重なり合いからくるものようである。船とは大きくて遠くへ旅するものという感がある。そこで馬車もそれに習い、大型旅行用の berline を用いたのであろう。なぜなら、主人公ジュヌヌは、この時やっとあのいやな修道院から抜け出し、あこがれの自由な世界へ出ることになり、夢多き人生行路への第一歩を踏み出すところだからなのである。モーパッサンは berline という語を旅行する時のみ使用している。

(例4)

Le concierge et sa femme vinrent saluer en fermant la portière; ils reçurent les dernières recommandations pour les malles qui devait suivre dans une charrette; et on partit. (p.7)

門番夫婦が門をしめかたがた見送りに出てきた。そしてその後から荷車でゆくはずの荷物について最後の注意をうけた。さてそこで馬車は出発した。

この場面では、ただ単に旅行カバンを乗せる馬車が問題となるだけで何ら貴族的なイメージも描かれていない。このような場合には馬車のそれぞれの名称が出されることが多いようである。

(例5)

Une voiture entra dans la cour. On lisait dessus: 《Lerat, pâtissier à Fécamp. Repas de nocés》; et Ludivine, aidée d'un marmiton, tirait d'un trappe ouvrant

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

derrière la carricole beaucoup de grands paniers plats qui sentaient bon.(pp.56-57)

一台の馬車が中庭に入ってきた。馬車の上には「フェカン町御菓子舗ルラ、御婚礼用御料理調達」という文字が読まれた。リュディヴィヌが見習いのコックの手を借りて、車のうしろに口をあいている揚蓋から、おいしい匂いのする大きな平たいかごをいくつも取り出していた。

この例5は、非常にめでたいことを表わす場面であるから、例の2でも示した通り voiture という語が先ず使用されている。noces「婚礼」という語と直接関係しているからであろう。ところが、ひとたびこれを扱う者が女中のリュディヴィヌや見習いコックになったりすると、この voiture は carride という語で表わされることになる。

ところで、同一段落内である一つの同じ馬車が3通りの言い方で描かれる場合が次の例である。

(例6)

Au trot inégal des deux bêtes, la calèche longeait les cours des fermes, faisait fuir à grands pas des poules noires effrayées qui plongeaient et disparaissaient dans les haies, était parfois suivie d'un chien-loup hurlant, qui regagnait ensuite sa maison, le poil hérissé, en se retournant encore pour aboyer vers la voiture, Un gars en sabots crottés, à longues jambes nonchalantes, qui allait, les mains au fond des poches, la blouse bleue gonflée par le vent dans le dos, se rangeait pour laisser passer l' équipage, et retirait gauchement sa casquette, laissant voir ses cheveux plats collés au crâne. (p.134)

2頭の馬は不ぞろいの速足で駆け、馬車は農家の前庭に沿って走っていった。びっくりした黒い牝どりたちは大またに逃げ、垣根の中にもぐって姿を消した。時として、狼犬がほえながら追いかけてきた。やがて毛を逆立てて帰ってゆくが、それでもまだ後を振向いては馬車の方にほえた。泥だらけの木靴をはいた一人若者が、のんきそうに長い脚を引きずり、手をポケットの奥につっこみ、青い仕事着の背中を風にふくらませながら歩いていたが、馬車を通すために脇によけた。そして不器用な手つきで帽子を脱いで、頭の鉢にべったりくっついた、癖のない髪をみせた。

最初は calèche という語でこの馬車が表されている理由は、それを引く馬が bêtes であり（つまり chevaux でなくて）、その上不ぞろいな走り方をしており、高級なイメージとはほど遠いからであろう。だがこんな馬車でも、百姓どものところを通り、家畜をけちらしてゆくところでは、いくら落ちぶれてしまったといっても、それでもやはり貴族であるには

『女の一生』における固定観念と「馬車」

違いないということを誇示したいというジュリアンの気持ちを反映させるかの様に、わざわざこの馬車に *voiture* を使い、さらには仕事着を着て、泥だらけの木靴をはいた若者がこの馬車を通すためにわきへ寄って、帽子をとり、尊敬の念でも示したのなら、この馬車は *équipage* 「華美な馬車」というところに迄高められてゆく。これは周囲の状況や階級差などによって、同一の馬車がこのように様変わりをするのである。

(例7)

Il s'arrêta pour laisser passer la voiture. Il tenait d'une main sa soutane relevée par crainte de l'eau du chemin, et ses jambes maigres, vêtues de bas noirs, finissaient en d'énormes souliers fangeux.

Jeanne baissa les yeux pour ne pas rencontrer son regard; et Rosalie, qui n'ignorait rien, devint furieuse. Elle murmurait: 《Manant, manant!》 puis, saisissant la main de son fils: 《Fiches-y donc un coup de fouet.》

Mais le jeune homme, au moment où il passait contre le prêtre, fit tomber brusquement dans l'orinière la roue de sa guimbarde lancée à toute vitesse, et un flot de boue, jaillissant, couvrit l'ecclésiastique des pieds à la tête. (p.337)

司祭は馬車を通すために立ち止った。道の水がはね返るのを恐れて、片方の手で衣のすそをからげていた。で、黒い靴下をはいたやせたすねの下に、大きな泥だらけの靴が見えていた。ジャンヌは司祭と視線を合わせたくないの、目を伏せていた。ところで、ロザリの方は、何もかも承知しているので、かっとなった。「畜生め、畜生め！」とつぶやいていたが、息子の手を握るなり言った。「さあ、ひとむちくれてやれ！」ところが若者は、司祭のそばを通るとき、全速力で走っているがた馬車の車輪をいきなりわだちの中にはめてしまった。で、泥水がばさっとほとばしって、坊さんは頭の上から足の先まですっかりしぶきをかぶってしまった。

例の7では、先ず *voiture* が出てくるが、文頭のIlがトルビヤック神父を指すものであり、神父に見合った語の使用法を考えて *voiture* としたのであろう。だが実のところ、この馬車は高級なものではなく *guimbarde* という荷馬車が本来の姿なのである。場面がドニという百姓の手にこの馬車が馭されることに焦点が当てられるようになると、本来の姿である *guimbarde* という語で乗り手との均り合いを保とうとするのである。又この馬車が泥を神父にひっかけるところでは、このボロ荷馬車と泥ならイメージも合うし、今迄さんざんジャンヌがいじめられてきたトルビヤック神父を *ecclésiastique* 「聖職者」というもったいぶった言い方をしておいた上で、この神父に泥をひっかけて、頭の上から足の先まで品位を落とし、これ迄の仕返しをしたかのようなのである。

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

（例8）

Or un seul homme dans le pays conservait la spécialité des ornements héraldiques, c'était un peintre de Bolbec, nommé Bataille, appelé tour à tour dans tous les castels normands pour fixer les précieux ornements sur les portières des véhicules. (p.128)

さて、この地方で、紋章描きの専門技術を持ちつづけているものは、ただ一人しかいなかった。それはバタイユという名前の、ボルベックの絵師だった。馬車の扉に貴重な装飾を描くために、ノルマンディーじゅうの屋敷に、それからそれへと順ぐりに呼ばれているのだった。

この例では、馬車が *véhicule* という形で表わされているがこの馬車を扱かう者が画家のバタイユであることに注目すれば、納得がゆく。*véhicule* には、馬車という意味以外に、絵画の用語で「展色剤」という意もあり、この場合、実にぴったりと当てはまる。

以上見てきた通り、モーパッサンが馬車を描く上で、このような社会と言語という立場からもよく考察が行き届いているのにおどろかされる。モーパッサンの師フロベールの教えを、彼は忠実に守っていると言ってよい。『ピエールとジャン』の序に付けられた小説論にもある通り、同じものは2つとなく、その瞬間毎に違うものであるという観点からの描写は、モーパッサンの場合、「馬車」に関しては師を一步超えていると言っても過言ではないであろう。

5. 0 「馬車」とその乗り手との関係の崩壊 — 作者のペシミズムの兆し

これ迄述べてきたように、モーパッサンは馬車とそれにたずさわる者との間に見事な均合いを示してきた。だが、実は、ひそかにモーパッサンはこの均衡を崩し、それによってジャンヌ一家が没落をし始める兆候のあることを暗示していたのである。

（例9）

Le baron se retourna, considera le petit homme abasourdi, et, cédant aussitôt à la contagion, il éclata, appelant sa femme, ne pouvant plus parler, —
《Re-re-garde Ma-Ma-Marius! Est-il drôle! Mon Dieu est-il drô-drôle.》

Alors la baronne, s'étant penchée par la portière et l'ayant considéré, fut secouée d'une telle crise de gaieté toute la calèche dansait sur ses ressorts, comme soulevée par des cahots. (p.132)

男爵も振り向いて、茫然自失の態のちび公を見た。するとたちまち笑いがうつって、大声に笑いだした。もはや話すことなんかできずに、大声を上げて夫人を呼んだ。「ま、

『女の一生』における固定観念と「馬車」

ま、見てごらん、マ、マ、マリウスを！滑稽じゃないか！いやはやまったく滑稽だ！」
 そこで男爵夫人も扉から上体を乗り出して、少年の姿を見たが、これまた猛烈な笑いの発作におそわれたので、馬車全体が凸凹道でゆり揺りあげられたように、ばねの上でおどった。

この例の9で初めて馬車とその乗り手との関係の均衡が壊されることになる。ここでは、baron や baronne という語を使って乗り手を示しているにもかかわらず、従来通りであれば当然voitureであるはずだが、calècheという言い方で馬車を登場させている。事実、馬車と乗り手との関係が崩れた時を機に、この一家が没落してゆくのである。この場面のすぐあとで、ジュリアンが父である男爵に向かってこう言っている：《Il me semble que ce n'est pas à vous de dire. Nous n'en serions pas là si vous n'aviez gaspillé votre fortune et mangé votre avoir. A qui la faute si vous êtes ruinés?》(p.133)（「あなたには笑えるなんてことができないと私には思えますがね。あなたが私達の富を浪費し、財産を食いつぶしてしまってなかったら、私達はこんなふうにはならなかったでしょうよ。あなたが破産をしても、誰の責任だと言うのです?」）幸福そうに見えていたジャンヌ一家も、この場面のあたりから不幸になってゆくかもしれないという不安がどの読者にも感じられることであろう。

(例10)

Lorsque la chaise de poste s'arrêta devant le perron et que la figure heureuse du baron parut à la vitre, ce fut dans l'âme et dans la poitrine de la jeune femme une émotion profonde, un tumultueux élan d'affection comme elle n'en avait jamais ressenti.

Mais elle demeura saisie, et presque défaillante, quand elle aperçut sa petite mère. La baronne, en ces six mois d'hiver, avait vieilli de dix ans. (p.225)

駅馬車が入口の石段の前に止まって、男爵の幸福そうな顔が馬車の窓にのぞいたとき、若妻の胸の中に、魂の中に、これまでかつて感じたことのないような深い感動がわきおこってきた。

だが母親の姿を見たとき、ぎょっと立ちすくんで、ほとんど、失神せんばかりであった。男爵夫人はこの冬の6ヶ月ばかりの間に10年も年をとっていた。

この例でも前例同様、baron や baronne が乗っていても voiture を使わず、他の言い方をしている。この場合、chaise de poste 「駅馬車」というのを登場させているが、前例とやはり同様に、何か不幸な、不吉な事柄を示す前兆となっている。駅馬車は不幸なものを

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

運んでくる不吉の駅馬車なのである。

(例11)

Elle sortit de son lit, exténuée et haletante, comme si elle eût fait une grande course. La voiture contenant les malles et le reste du mobilier était déjà chargée dans la cour. Une autre carriole à deux roues était attelée derrière, qui devait emporter la maîtresse et la bonne. (p.335)

彼女は寝床から起き上がったが、からだは綿のように疲れ、息は切れ、まるで長い道を駆けたのちのようだった。トランクや家具の残りを運ぶ馬車は、すでに庭の中で積荷が終わっていた。そのうしろにもう一台、2輪馬車に馬が繋がれていたが、それは女主人と女中を運ぶ車だった。

例の11は、ジャンヌが引越しをする場面である。今や全く落ちぶれ果ててしまったジャンヌには、貴族らしさを示せるものは、以前から使用している家具だけである。この家具を運ぶ馬車は、今なお落ちぶれたとはいえ、高級感を持たせて貴族らしく、*voiture* という語が当てられている。ところが、ジャンヌ本人の乗る方の馬車には *carriole* という語を使い、このボロ馬車にジャンヌと女中が乗ることで、いかにジャンヌが落ちぶれたかを示そうとしているかのようである。

6. 0 「馬車」と悲劇—パエトーン

(例12)

Julien venait d'acheter dans une vente publique une nouvelle voiture, un phaéton ne demandant qu'un cheval, afin de pouvoir sortir deux fois par mois. (p.205)

ジュリアンは最近売りたてで新しい馬車を買ったところだった。無蓋の軽快な4輪馬車で、これなら馬は1頭しかいらず、月に2回外出できた。

(例13)

Comme les feuilles des arbres étaient encore claires, et l'herbe humide, et qu'ils ne pouvaient, ainsi qu'au coeur de l'été, s'enfoncer dans les taillis des bois, ils avaient adopté le plus souvent, pour cacher leurs étreintes, la cabane ambulante d'un berger, abandonnée depuis l'automne au sommet de la côte de Vaucotte. (p.276)

『女の一生』における固定観念と「馬車」

木々の葉はまだ透いていたし、草原は湿っていて、真夏のように雑木林の奥深く入りこむことができなかったので、2人は、多くの場合、2人の抱擁を人目から隠すために、去年の秋からヴォーコットの丘の頂にうち捨てられたままになっている、羊飼いの移動式小屋を利用していた。

馬車と悲劇性という点に関して、最も重要なのが例の12に出てくる *phaéton* である。この馬車の名の由来は、ギリシア神話パエトーンの話に出てくるパエトーンによるものである。アポロとクリメネの間に生まれたパエトーンが、アポロの火の馬車から墜落死するのと同様、ジュリアンが馬車の転落事故で命を落とす運命にあることを、ジュリアンにこのパエトン馬車を買わせることによって作者モーパッサンは、読者に暗示していたのではないだろうか。*voiture* が *phaéton* と並置されているが、パエトーンがアポロの子であるところから、高級なイメージを思い起こさせるからである。

ところで、実際に、ジュリアンが馬車で転落死をしたのは、このパエトン馬車に乗ってではなく、例13に見られる *cabane ambulante* という移動式の小屋に入っている時のことであつた。例の13では馬車という語は使用せずに、「移動式の小屋」という言い方をしている。実は、この小屋は純粋な意味での馬車とは言えないが、現実には馬車の等価物と見なせるものである。この移動式の小屋には、車輪もかじ棒も付いていて、どこへでも移動できるようになっている羊番の小屋であり、小屋というよりはむしろ馬車に近いと考えられる。さらに、*cabane* には「動物などの隠れ家」の意があり、ジュリアンと人妻ジルベルトとの人目を忍んでの密会の隠れ家として好都合のものとなっている。そして2人が密会を重ねるうち、その小屋が動いて谷底に2人を乗せたまま転落することになるわけだが、表面上は事故死という結果となる。

7. 0 結 語

以上例をあげて見てきたように、モーパッサンは、とりわけ、馬車に関して適所適語の考えを忠実に行って、うまく文中にちりばめるという文体上の一つの特徴を持っていることが、『女の一生』の中で明らかになったが、実は、この馬車というものがモーパッサンのペシニスムに大きな役割を果しているのである。『女の一生』は人間の孤独が主題となっている。そして、アンドレ・ヴィヤルも言う通り、モーパッサン文学は2回性の特徴となっている。2回性というのは、例えば、ジャンヌの若い時代と老年になってからの同一の場所である「ポプラ屋敷」への2度の訪問などを指し、夢多き若い時代には、結婚をしてやがてここに住むことになるのだという幸福感に満ちあふれていた頃のこの屋敷への訪問、そして落ちぶれ果てた老年になって、すでに人手に渡ってしまったかつては自分のものであつたこの屋

大手前女子短期大学・大手前栄養文化学院・大手前ビジネス学院「研究集録」第12号（1992年）

敷への訪問というように、時を隔てて同一場所へ訪問することにより、時の推移による悲しさを表わす手法である。これはモーパッサン独自のものではなく、フロベール、バルザックに学んだものだと言われている。この2回性と同時に、『女の一生』では、見すごすことのできない手法として「対比」が大きな位置を占めることである。この作品の場合、登場人物が実に好対照をなしている。ジャンヌとロザリ、ポールとロザリの息子、トルビヤック神父とピコ神父など全く完全な対比を印象付けられる。2回性の方は、ポプラ屋敷への2度の帰還、高地ノルマンディーへの2度の旅、イポールへの2度の散歩、小さな森への2度の訪問、貴族の隣人たちへの2度の訪問など。この手法は作品全体に統一を与えているが、最初の時と2回目とを対比することにより、楽しかった頃とみじめな今とをうき立たせ、哀しみを一層深いものにする。そして、それにはことごとく乗物、主に馬車が大きく寄与しているのである。ここでは馬車は単なる乗り物としての意味以上のものを持っているのである。

それでは、なぜ乗り物がこれ程迄にモーパッサンの文学に登場し、重要な位置付けがなされているのだろうか。ゴンクールは、彼の日記、1889年6月15日付けで、「固定観念」という表現を用いている。³⁾この固定観念については一般によく知られているが、モーパッサンにつきまとう死の恐怖のことである。彼はこの固定観念から逃れたいとひたすら願望しており、そういう潜在意識が文学にまで反映してきているのであろう。ひとところにはじっとしていられないモーパッサンの心、つらい現実、苦しい現実からどうしても逃げ出したい。そして自分につきまとして死ぬ程苦しめる固定観念から自由になりたいという気持ちが、作者に自然と乗り物を多く登場させ、その乗り物を細かく描写し、的確に表現することで、モーパッサンは文学作品の中に現実からの逃避の道を見い出していたのではないか。あの固定観念がモーパッサンをこのような方向へと否応なく狩り立てていったように思えるのである。

(注)

- 1) G.J. Becker ed.: *Documents Of Modern Literary Realism* pp.412~25
- 2) J.T. Shipley: *Dictionary Of World Literature* p.278
- 3) Les Goncourt: *Journal* 6.15, 1889

BIBLIOGRAPHIE

1. G.J. Becker.: *Documents of Modern Literary Realism*, Princeton, 1973.
2. M. Desporte et les autres: *《Une Vie》 de Guy de MAUPASSANT et le Pessimisme*, Edition Marketing, 1979.
3. R. Dumesnil: *Le Réalisme et le Naturalisme*, Paris, 1964.
4. Les Goncourt: *Journal*, Paris, 1889
5. A. Lanoux: *Maupassant le Bel-Ami*, Fayard, 1967.

(河盛・大島訳『モーパッサンの生涯』新潮社1979.)

『女の一生』における固定観念と「馬車」

6. A.M. Schmidt: *Maupassant*, Edition du Seuil, 1962.
7. J.T. Shipley: *Dictionary of World Literature*, New Jersey, 1972.
8. A. Vial: *Guy de Maupassant et l'art du Roman*, Nizet, 1954.
9. 大塚幸男著『流星の人モーパッサン』白水社 1977.

Guy de Maupassant : Pierre et Jean
Boule de Suif
Rose (短篇集に所収)

モーパッサンの作品は、テキストに使った『女の一生』を含めて、すべて Conard 版を使用。